

2008年3月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500 hPa 高度で見ると、極東域において顕著なリッジの発達がたびたび見られ、アリューシャン低気圧は西側で平年より弱かった。また、シベリア上空では、寒帯前線ジェットが明瞭で帯状流が卓越していたため、シベリア高気圧が発達しにくかった。そのため、中緯度帯への寒気の南下が少なく、極東域のほかユーラシア大陸の広範囲で、対流圏下層に高温偏差が見られた。北太平洋のストームトラック域では、高周波擾乱の活動が平年よりも不活発だった一方、北大西洋のストームトラック域では南東側で平年よりもかなり活発だった。

熱帯域の対流活動は、インド洋から海洋大陸付近で活発で、特にインド南部で活発だった。一方、西部太平洋赤道域では月を通して不活発だった。赤道季節内振動 (MJO) の対流活発な位相の東進は明瞭に見られた。対流活発な位相は上旬から中旬にかけて大西洋からインド洋を、下旬にはインドネシア付近から西半球を通過した。対流活動の分布に対応して、対流圏上層では、インド洋上に赤道をはさんだ高気圧性循環偏差の対、中部太平洋上に低気圧性循環の対がそれぞれ見られた。対流圏下層では、西部太平洋赤道域で明瞭

な東風偏差が2007年11月以降持続しているが、中部の東風偏差は2008年2月に比べて弱まった。

南方振動指数 (SOI) は+1.3となった。

世界の天候

2008年3月の世界の月平均地上気温平年差は、+0.30°Cで、1891年の統計開始以来、7番目に高い値となった。世界の3月平均地上気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.81°C/100年である。

○東シベリアから中東の広い範囲で異常高温となった。

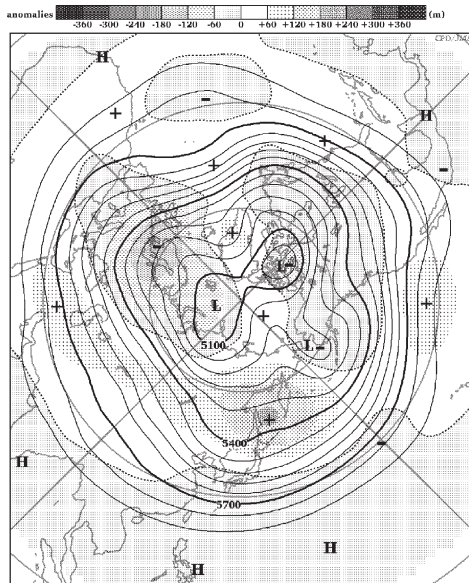
○中央シベリアからヨーロッパでは、低気圧の活動が平年より活発で、広い範囲で異常多雨となった。

○フィリピン南部からインド南部では、対流活動が平年より活発で、異常多雨となった。

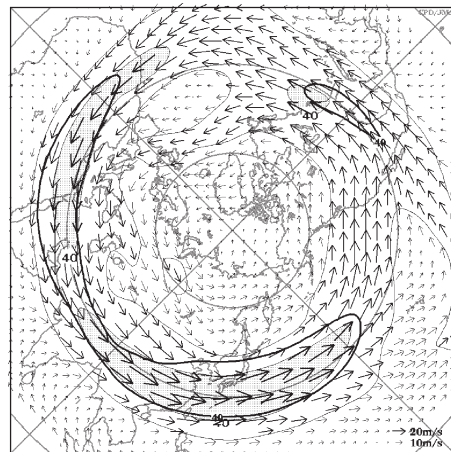
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>

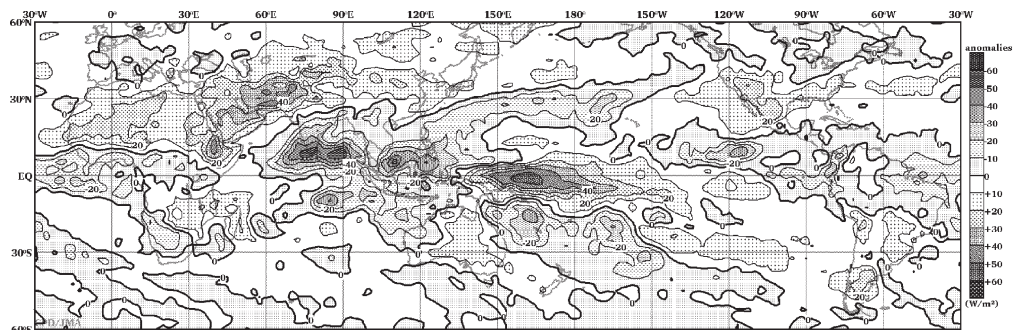


2008年3月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979～2004年のデータから作成。

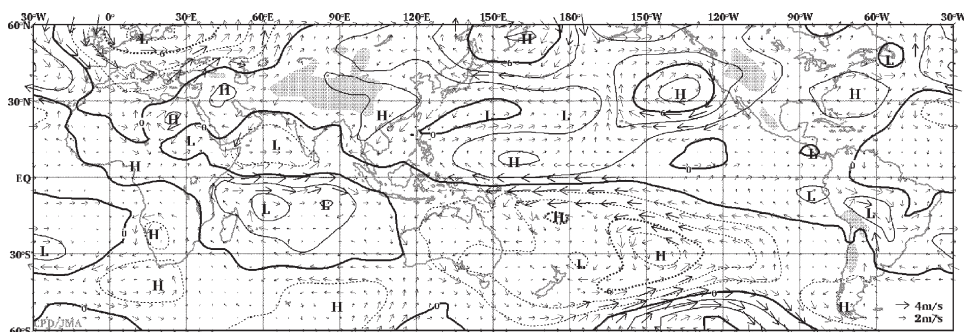


2008年3月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

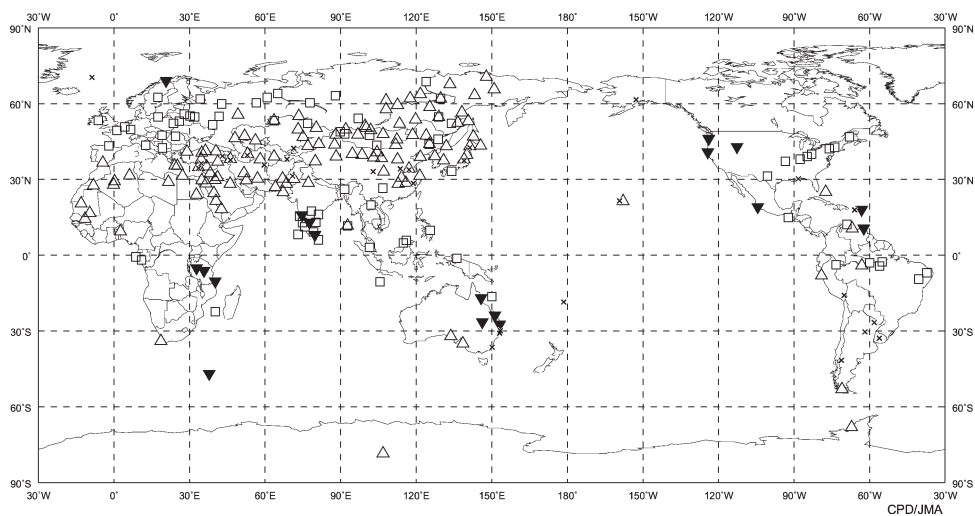
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979～2004年のデータから作成。



2008年3月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA。年偏差は1979～2004年のデータから作成。



2008年3月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979～2004年のデータから作成。



2008年3月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。